清洲城下町遺跡

調査の経過

清洲城下町遺跡は、濃尾平野を南流する五条川の中流域に形成された、標高５ｍ前後の自然堤防、およびその後背湿地上に展開する遺跡である。

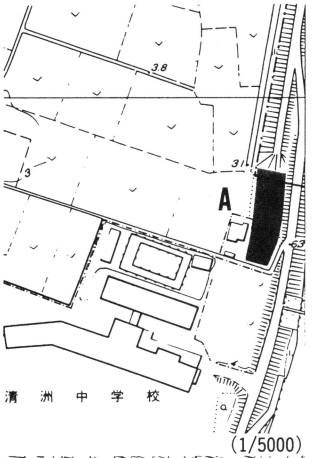
発掘調査は名古屋環状２号線建設(昭和59年度～61年度)、五条川河川改修(昭和61年度～現在)、県道新川・清洲線拡幅（昭和62年度～現在）の各事業に伴って事前調査が行われている。これまでの調査では、主に、集落のあった古墳時代後期から平安時代前期の時期、寺院跡が想定される平安時代後期の時期、集落が点在した鎌倉時代から室町時代前期の時期、城下町が構成された室町時代後期から江戸時代初期の時期、宿場町の形成された江戸時代の時期が確認されている。このうち城下町が展開した時期は、「総構」の３重の堀が設定されるという画期をもって、更に区分できる。この城下町期の遺構群は、朝日西遺跡や廻間遺跡にも該当する時期の遺構群がみられることから、これらを含めた総体を「清須城下町」として把握していく必要がある。

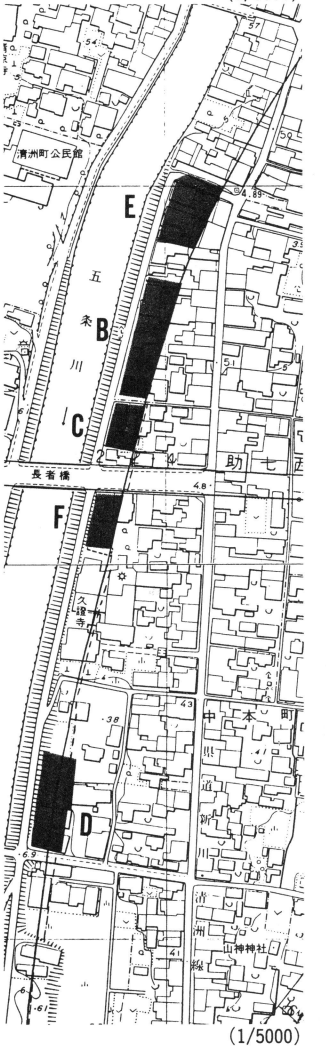
本年度の発掘調査は、河川改修関係（Ａ～Ｆ区）面積計6980㎡、および県道新川・清洲線拡幅関係（Ｇ区）面積計50㎡である。本年度の調査地区では、Ｅ区で昨年度検出した「中堀」の南肩の検出が予想され、他の調査区はいづれもこの「中堀」の外側に当たる。

検出された遺構は城下町期と宿場町期の２時期に属するものであり、古代から中世の時期については良好な資料は得られなかった。特に、今回の調査では、中堀の南半部が検出され、西肩部分で石垣が発見されたことと、これまで明瞭な遺構が検出できなかった宿場町期前半（17～18世紀後半）の遺構群が検出できたことが特筆されよう。　（鈴木正貴）

Ｃ区　畑跡

Ｂ区　ＳＸ01出土状態





上図は千田嘉博「地籍図1　清須城復元図」
『清須――織豊期の城と都市――資料編』による。

第1図　元年度調査区位置図

遺構

本年度の調査のうち、B・C・E区について調査区ごとに記述する。

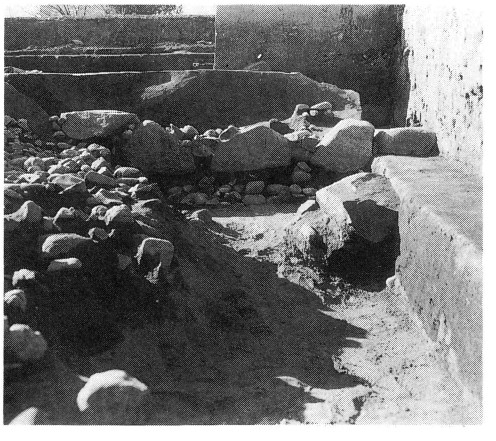
B区　城下町期の主要な遺構としては溝・井戸・畝状遺構が検出された。溝にはN－20°－E前後を示すものとそれにほぼ直行する方向を示すものを検出した。この調査区では前者の方向を示すものが7条、後者のそれが2条検出された。井戸は確実に城下町期と推定できるものは3基、井戸枠は桶組みであった。畝状遺構は調査区の北東隅で検出され、それは前者の溝の方向に平行した状況であった。

宿場町期の遺構としては、真北方向を示す溝、井戸、廃棄土坑等が検出された。この調査は町屋の裏側に当たる。井戸は3基検出され、井戸枠はこの時期も桶組みであった。また廃棄土坑と考えられるSX01からは17世紀末から18世紀（宿場町期前半）にかけての遺物がまとまって多量に出土した。

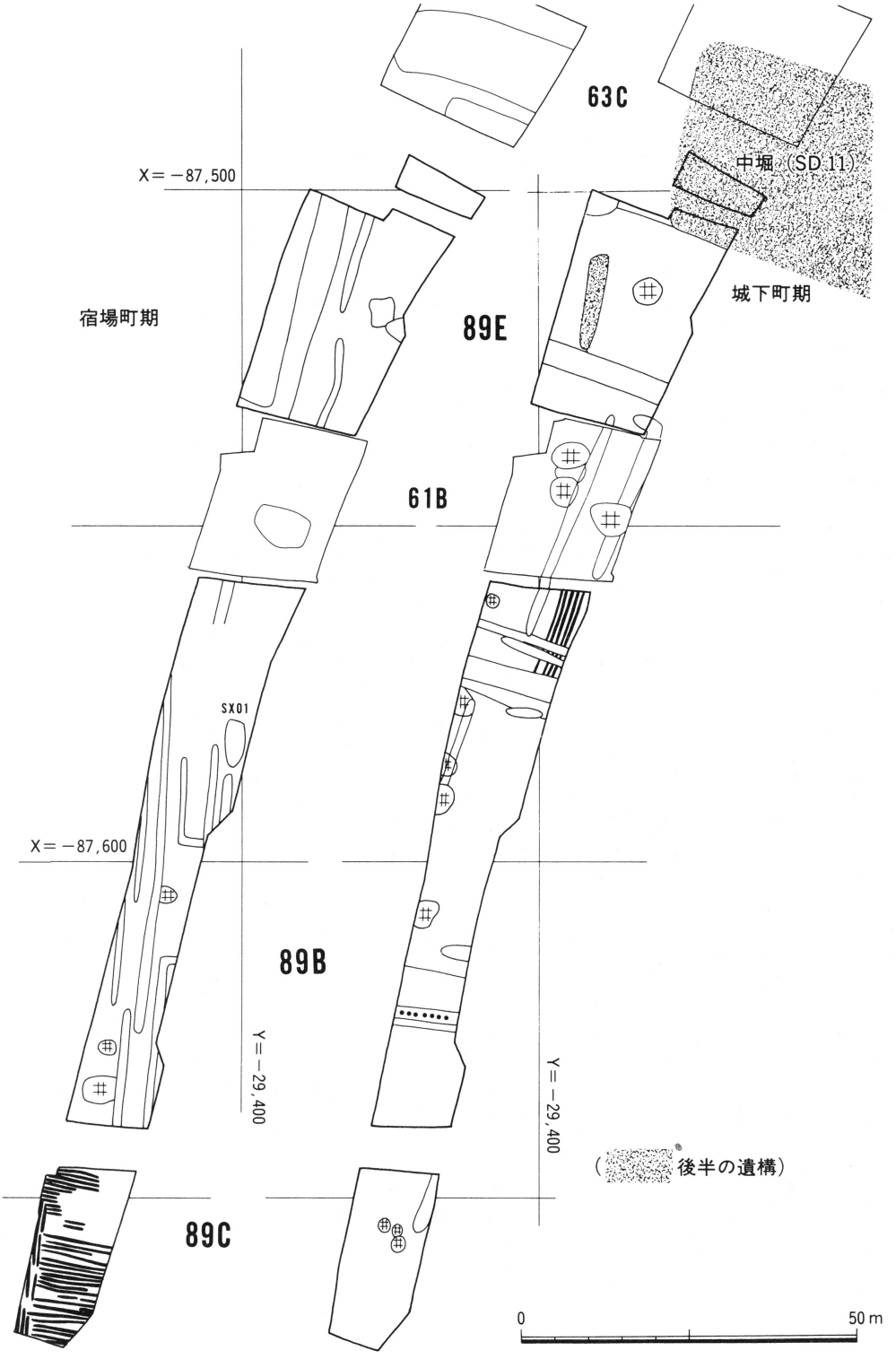
C区　城下町期の遺構としては、溝1条、井戸3基、土坑2基が検出された。また開始時期については特定し得ないが、堆積状況から五条川瀬替え（1794年）以前の畝状遺構がほぼ調査区全体から検出された。

E区　城下町期の遺構としては、溝4条、井戸が検出された。この調査区では63C区で検出された中堀の南肩及び西肩部分が検出された（SD11)。この中堀の西肩部分で石垣が、南肩部分では拳大の円礫を敷き詰めた状況が確認された。石垣の検出は清洲城下町の調査では初めてのことである。また61B区で検出された城下町期前半の溝の続きも検出した。

宿場町期の遺構としては、L字状に屈曲する溝、廃棄土坑、排水施設、溝、土坑を検出した。この調査区で検出した溝は、N－15°－Eを示しており、B区のそれとは異なっている。廃棄土坑からは19世紀前半（宿場町期後半）の遺物が多量に出土した。（加藤とよ江）



E区　中堀（SD11）石垣出土状態

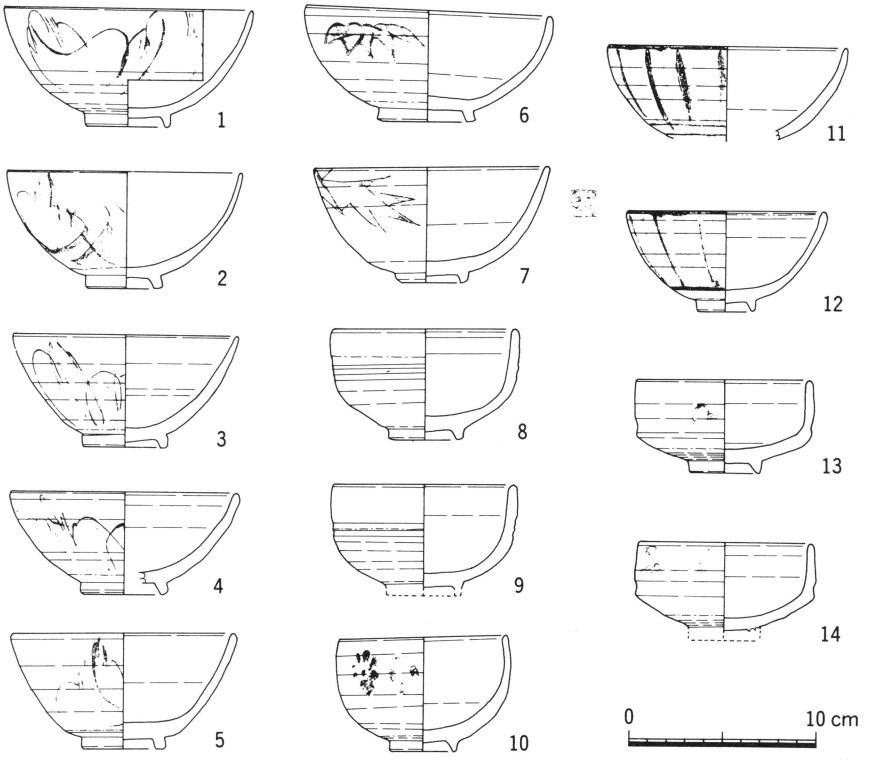


第２図　Ｂ・Ｃ・Ｅ区主要遺構の配置

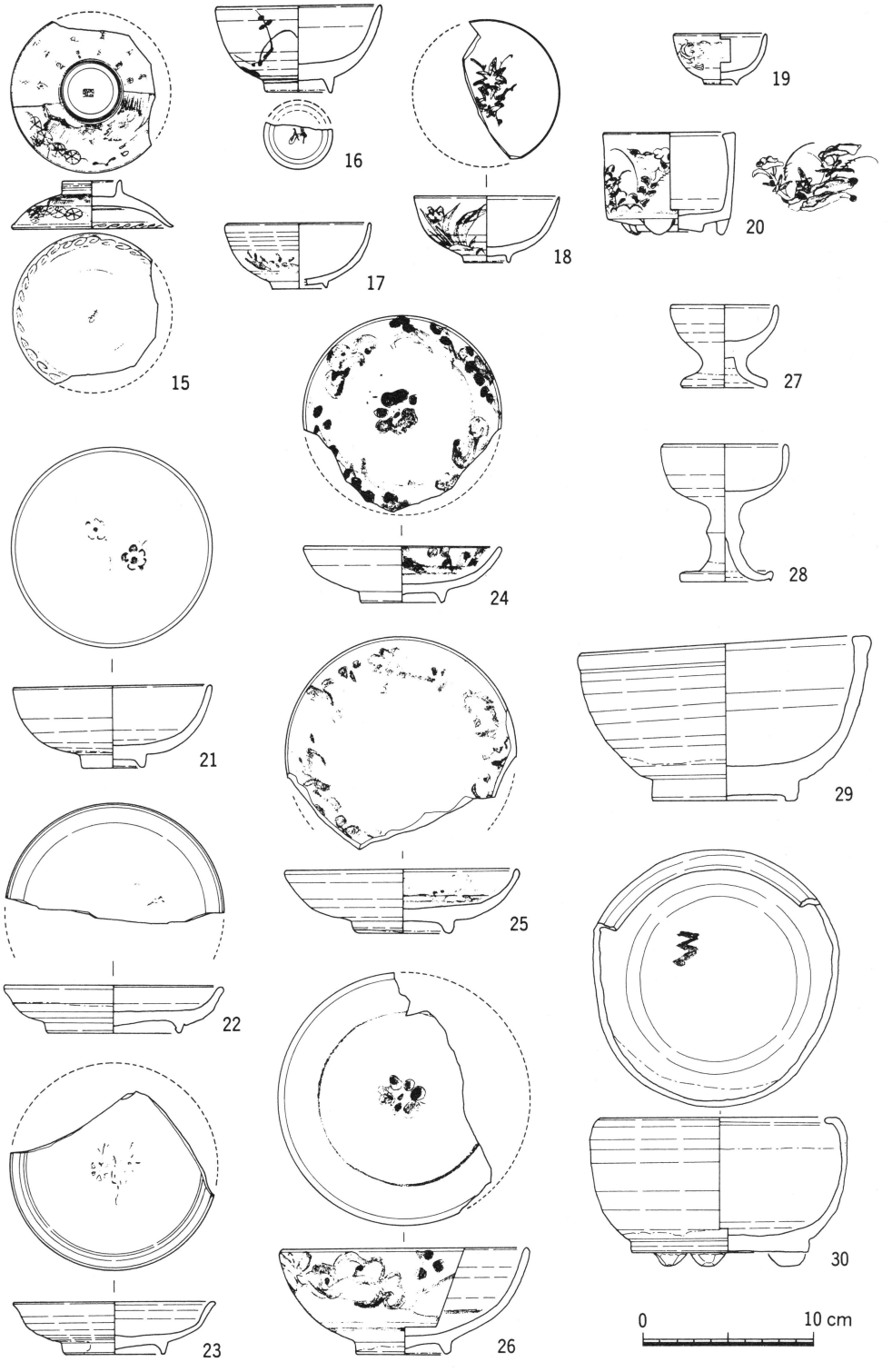
出土遺物

出土遺物の大半は瀬戸・美濃産の陶磁器類で、漆器の椀、箸、下駄、木像、柿経などの木製品類と古銭、煙管、小柄などの金属製品類、硯、砥石、石臼、五輪塔、宝篋印塔などの石製品類が出土している。これらの出土遺物は城下町期に属するものが大部分であるが、Ｂ・Ｅ区において宿場町期の良好な資料を得ることができた。このうちＢ区ＳＸ01（廃棄土坑）より出土の一括資料についての概略である。

Ｂ区ＳＸ01より多量の陶磁器が出土したが、その大半が瀬戸・美濃産の陶磁器である。他に数点であるが箸、漆椀の木製品や硯、砥石の石製品も出土している。第３図１～５は柳茶椀、６は呉須絵椀、７は貫入のある長石釉椀で上絵付が施される。８、９は腰錆椀、10は梅文椀、11・12は麦藁手椀、13・14は呉須絵小鉢である。第４図15～20は磁器製品で、17・19は上絵付が施されている。21は梅文小鉢、22は梅文皿、23は摺絵梅文皿、24・25は呉須絵皿、26は呉須絵鉢、27・28は灰釉仏飯具、29は小型鉢、30は小型火鉢である。その他徳利・瓶・灯明具・甕・摺鉢なども出土している。全体的な傾向を椀について見ると広東椀は出土しておらず、柳茶碗が多い。五条川瀬替普請（1794）による盛土下より検出していることから、それ以前の18世紀後半頃の宿場町前半期の遺物である。　（小澤一弘）



第３図　Ｂ区ＳＸ01出土遺物(1)



第４図　Ｂ区ＳＸ01出土遺物(2)

まとめ

1．平成元年度の調査では、城下町期～近世にかけての良好な遺構群を検出したが、それを遡る時期の遺構は全く確認し得ず、中世以前の遺構もみられた県道新川清洲線関係の調査とは、その様相を著しく異にした。

2．城下町前期の遺構としては、B・E・F区を中心に検出された溝群がある。この溝は、幅2～4m程度で、ほぼ同じ方向性（N－20°－E）を有しており、これまでの知見からすれば、武家屋敷地を囲む溝と考えられるものである。溝群は、C区北部を南限として、それ以南では、過年度の調査（61C・D区）でも全く検出されていないことから、前期段階の城下町の南限もこのあたりに設定することが可能となる。

また、B区北端では、畑地の「畝」遺構が検出された。これは、検出状況が比較的良好であったにもかかわらず、面的な広がりに欠けることから、広範囲に展開する畑地の一部ではなく、特定の屋敷地内に形成された小規模な耕作地であったと推定し得る。

3．城下町後期の遺構としては、「中堀」をあげることができる。堀の西端には、一辺数十cmの自然石により、「石垣」が組まれていたが、清洲城下町では、これまでの調査でみる限り、中堀、外堀共、石垣が組まれていた形跡は全くなく、何故、この部分にのみ、「石垣」が必要であったか、今後の課題といえる。

中堀以外の遺構としては、B区を中心に、小規模の溝群や井戸等の検出例が多かった。中堀の外（南）側には、「短冊型」の地割を有する町屋群が形成されていたものと思われる。

4．近世の遺構としては、B区・E区に展開する溝群がある。この溝群のうちには、L字状に屈曲するものもあり、また遺物量も比較的多かったことから、屋敷地を巡るものと考えられるが、それにより区画される空間は、比較的大きなものが想定でき、一般的な町屋地とは考えられない。

一方、C区では、ほぼ全面に「畝」遺構を確認することができた。これは、B区で検出された様な小規模なものではなく、広範囲に広がる畑地の一部であったと推定し得る。

また、畝遺構は、その直上より、現五条川の方向から連続的に搬入されたと考えられる厚さ1.5m以上の盛土により覆われていたが、この地業は、寛政6年（1794）の五条川瀬替普請によるものと考えられる。

5．今年度の調査区においても、各所で、地震による「噴砂」の痕跡をみとめることができたが、特にC区においては、幅5～15cm程で、N－35°－Eの方向性をとるものを何条か、確認することができた。この噴砂は、城下町前期の遺構埋土を突きぬけ、畝遺構により上部を削平されていることからその発生年代は16C後半以降1794年頃までの間に限定し得るものであり、天正13年（1586）の天正地震のものである可能性が極めて高いといえる。

6．今回の調査の結果、これまで漠然と「宿場町期」と考えてきた「清須越」以降の時期について、多くの知見を得ることができた。具体的には、五条川東岸では、寛政年間の五条川改修に伴い、かなりの量の搬土を伴う整地が実施されていること、また盛土により埋没した畝遺構、一括性の強いと考えられる廃棄土坑（B－SX01）が存在すること、あるいは、「中堀」の一部が、清須越以降も、18C前半頃までは、現在の「美濃街道」のあたりまで、沼沢地として存在していたであろうこと、などである。

したがって、この地点についていえば、18C末頃、美濃街道の径路の変更をも含めた、大規模な土地利用の変更が行なわれた可能性が高く、恐らく、89E、89B、61B区などではこれを契機とし、街道に面した町並みから、町裏へと変化したものと思われる。また、遺物からみても、この時期以降、地元産の磁器が出現し、61A、61B区等にみられるように、出土量自体も急増の傾向をみせている。

宿場町清洲は、少なくとも五条川東岸については、18C末を画期として、町並み成立期から成熟期へと大きく変貌していったものと思われる。　（梅本　博志）

E区全景（城下町期）